

第3回蓄電池のサステナビリティに関する研究会  
議事要旨

○日時：令和4年7月7日(木) 10:00～12:00

○場所：Web 会議形式

○メンバー：

<座長>

所 千晴 早稲田大学 理工学術院 教授／東京大学 大学院工学系研究科 教授

<メンバー>

伊藤 肇 一般社団法人日本自動車部品工業会 技術部長

岩崎 裕典 PwC アドバイザリー合同会社 エネルギーセクター ディレクター

菊地 美徳 一般社団法人日本自動車工業会 環境技術政策委員会 電動車部会 部会長

玄地 裕 国立研究開発法人産業技術総合研究所 安全科学研究部門 研究部門長

森島 龍太 一般社団法人電池サプライチェーン協議会 業務執行理事

中根 育朗 一般社団法人電池工業会 事務局長

福原 あゆみ 長島・大野・常松法律事務所 弁護士

○オブザーバー：

日本自動車輸入組合

石油天然ガス・金属鉱物資源機構

国土交通省

環境省

○議事概要：

- ・ 冒頭、事務局から資料3、4、5について説明。出席者からの主なコメントは以下の通り。

○研究会の議論の方向性、中間整理について

- ・ 総論の大きな方向性に異論はない。
- ・ 欧州で議論が活発に進んでいるなかで、実証での課題洗い出しは非常に重要。
- ・ 他国において検討を進めている制度とのハーモナイゼーションを意識しつつ、日本としてどのように進めていくべきか、引き続き議論していきたい。
- ・ 海外とのハーモナイゼーションの件について、地政学的に非常に難しい局面。どこと一緒に連携していくかといった方向出しについて議論したい。幅広く一緒に連携していくのは難しいのではと考える。
- ・ 官民一体で前のめりに、事業者には積極的な参加をお願いしたい。

○ライフサイクルでのGHG排出量見える化について

(算定の対象範囲、活動量について)

- ・ 算出対象が「原則、実在のEV、PHEVに搭載される電池パック。」と限定されているが、選択肢としてHEVも含めても良いのではないか。
- ・ 部材ロスもカウントして、ロスを減らすことの効果もCFPで評価する考え方は良いと思うが、

リサイクル材を回収した後、リサイクル材の製造工程にカウントということかと思う。材料投入時のロスのリサイクルに回すことは当たり前に行われてきている。計算の切り分けをきちんとしていく必要があると思う。

- ・ 試行事業は大方整理されている。インベントリデータについては、一次データを基本としながら、リサイクルなどは標準的な工程を想定してインベントリデータを使って計算する。一次データについては、データの取得、取得の手順が正しいか、その信用度合い等、考え方を明確にする必要があるかと思う。透明性を担保する意味でも必要。

#### (その他)

- ・ C F P 算出試行事業の目的「活動量の取得やC F Pの算出に必要な情報の交換が可能であることを検証すること」について異論はないが、実装を想定した「工数」視点での実証も必要と考える。部品メーカー等も含めて、算出工数・管理工数が膨大になるものを実装することは難しくなる懸念がある。
- ・ 新しい電池が開発された時に、新しい材料の取得も必要か。この先のことについても考えておく必要があるのではないか。データ等もどのくらいの頻度で更新していくか、こうしたルールも技術の進化を考慮すると将来的には必要ではないか。
- ・ E U バッテリー規則案について自動車以外のL I Bにも規制が入る上、それ以外においても喫緊の課題。

#### ○リユース・リサイクルについて

- ・ リサイクルについては、確立されていない中で、資源のない日本で都市鉱山を築くことは大切と思う。協力し進めたい。
- ・ B M (ブラックマス) について、今後リサイクルのポイントはスケール。B M (ブラックマス) が取引され始めており、コモディティ化が必要となる。フェアな市場を作ることが重要で、日本にマーケットを呼び込むことができる。日本が世界をリードする市場づくりが重要。
- ・ 処理側のデータがまだ足りない。本日 J O G M E C も入っているので、関係業界にヒアリングの上充実させていただければ。関係業界にも御協力をお願いしたい。

#### ○データ連携について

- ・ C F P と D D について試行事業を先行して進めることに異論はない。
- ・ 蓄電池のサステナビリティという観点だけでなく、サーキュラーエコノミー関係でもL C A、C F Pの話が多くなっている。また、データ連携についてもよく耳にするようになった。自動車業界、電池業界だけでなく、プラスチック等の材料業界においても、サーキュラーエコノミーとして広がりを見せている。横のデータ連携についても目配せしながら、日本全体での循環経済のしやすさを見出せると良いかと思う。
- ・ こういった連携基盤の構築は業界横断的、官民連携の場が必要。関係団体として協力していく。
- ・ S C を含む電池業界にとっては、電池産業全体で手計算することは避けたいところ。連携をあまりに重視しすぎて期限に間に合わないのは避けたいところ。
- ・ ユースケースをどう使うか、ユースケースのシナリオ構築が重要。中小企業にとって導入しやすいシステム、中小企業が使えるか、企業のデジタル化の度合いが違うので、いろんな声聞きながら進めて欲しい。情報発信の場の提供も必要と思う。